

神津島の

お年より作文集

第一一十集

神津島に金毘羅神社が
祀られた経緯と記録

石田 正一（七九歳）一頁

神津大好き！

浜川 喜久子（八二歳）十三頁

隨想・句・川柳

稻葉 タニ子（八三歳）三九頁

やつぱり家（神津）
がいい

梅田）千代子（八五歳）五九頁

私のあゆんだ道

石野田 起基（九〇歳）七一頁

思ひ出

清水 滝一（享年八一歳）九三頁

神津島に金毘羅神社が祀られた いきさつ（経緯）と記録

昭和九年十二月十日生 七十九歳

石田正一（つばきや）

本島に祀まつられている金毘羅神社は、いつ頃どの様ないきさつ（経緯）で何方がお祀りされたのか、その記録は残されていないのが実情であります。

本村の史実を研究された、故山下彦一郎先生や、「神津島の神々」と題して執筆された、故松本一氏の文献の中でもその記録が見当たらぬいようであります。

私が小学生の頃、（七十年以上前）祖母から何回も聞き伝えられて

いたので、金毘羅神社に対しては関心があり、何とか調べることが出来ないものかと考えてはいましたが、前述したお二人の史実の中にも祀られた年代等については記されていないようですし、況して私のような浅学非才な者に調べる術も無いのが実情でした。

然しがれ私が祖母からの聞き伝えと言うのは次

の様なことでした。

何時の頃だか知らない。



しくて、其の七軒の中に当家も含まれて一るだあ」との伝えでした。

其の七軒でお祀りした理由はと言いますと、七軒のどこかで漁船を持つていて（櫓船でしよう）、その水夫（かこ）七人で漁をしていました。という事でした。

「昔なあー金毘羅様は漁師が七軒で祀つたら

ある日の事、鰹漁かとび漁に出たのでは、と考えられます。操業中突風に遭遇して港に戻ることが出来なくなり時化の中何日も漂流し、船方全員が生きて妻子の待つ我が家に戻ることは出来ない状況だつたとの言い伝えでした。



金毘羅様の本殿

船方は悲愴な思いで流れたものでしよう。祖母からの聞き伝えによると、時化の中、流れながら漁師が崇める金毘羅大権現様に救いを求めようと、祈りながら（七軒家族全員の意味）『救つてくだされば、生きて家族のもとに生還させてくだされば、金毘羅大権現様へ七人揃つてお礼参りにあがります。大権現様お助けて下さい頼みます』と祈りながら流れているうち、本土の何処かにたどり着いたことを聞き伝えられました。

当時は連絡の出来ない時代ですから島では全員が死亡した事と想えていたのでしよう。七軒の家族の悲しみは悲愴至極であつたと思います。それが何日か、あるいは何十日後、島に戻つて来た訳だから其の時の喜びも察するにあまりあることだつたと思います。

その様な状況の下で救われた七人が、金毘羅神社の総社といわれる四国のかぬきの讃岐までお礼参りに上がり金毘羅大権現様のご神体をお受けしてお祀りした神社が、今日、神津島に祀られている金毘羅様だと祖母は話してくれました。あれから七十年以上、往時が偲ばれます。

私が小学生の頃といいましても十歳に成つていなかつたと思います。其の七軒はどこどこの家かを聞いてはいたものの、当家もその中の一軒であると記憶しているのみで、他は聞き流していた状態でした。時は流れ、祖母も私が十七歳の時、七十五歳で世を去り、金毘羅様のことも忘れていた頃でした。たしか二十歳を迎えた正月四日だつたと思います。

金毘羅様の寄り合いがあるので『呑平』宅に顔を出すようにとの連絡を受けて、初めて金毘羅神社の世話人の一人として会合に出席したのが初回の寄り合いだつたと記憶しております。其の時寄り合いに出席された人が、会合を開いた『呑平』宅のおじいさん、『五郎兵エ』のおじいさん、『源四』のお父さん（梅田源四郎）、『五郎右衛門』の父（石田昌一郎）、『清水八郎エ門』の母、と私『石田半四郎』、この6軒で寄り合つた記憶が最初です。

七軒の中には、梅田新八宅も含まれているのだと聞いてはおりましたが、新八宅からは何方も出席されなかつた記憶が残っています。昭和三十年代の初めでした。それから毎年、世話人の寄り合いを年一度、六十年近く続けてきた訳ですが、このところ何年か途絶えております。しかし時代の変遷で致し方ないと考えられます。

前記致しましたように、昔は正月四日になると年配者宅で会合を開き、一年の会計報告を行いながら食事会をしたものでした。当時はほと

んどの船からお灯明料の献納（寄付）があり、金毘羅様の維持費に当てられていた為、世話人の代表となる方は会計報告を必ず行うのが慣わしでした、持ち回りで世話人になられた方は、神社の境内を掃き、神棚を掃除し榊（さかき）はいつも枯らさないように、大変なご苦労をされできました。昔ほどではありませんが現在でも其のことは引き継がれております。金毘羅様は、神仏習合の神社で榊も供えるが焼香もする神社です。

世は移り歴史も薄れ、漁師の祟拝する対象の神様など心に止める漁業者の方々も数少ない時代に変わつてしまつたことは否めません。

さて、それでは何時頃の時代に金毘羅様をお祀りすることになつたのだろうか、私は其の点に大変関心を持つておりましたことは冒頭に申し上げましたが、平成十二年七月神津島に未曾有の大地震が襲いました、其のことは村民誰もが忘れる事が出来ない災害の記憶であろうと思います。

私はある日のこと、自分では行くともなく自然と金毘羅様へ足が向いていました。今、其の時のこと振り返ると不思議でなりません。

一応昔の様な世話人という事ではありますんでしたが、金毘羅様の本殿を開ける鍵を持っていたので本殿のガラス戸を開けてみたくなり、ガラス戸を開き、内宮の扉までも開いて見たい気持ちが起き、開けることにしました。気持ちの中ではもしかしてこのような事までして何か祟りでも、と思ひながら普段崇拜をし、一生懸命崇め

尽くしているので罰はないでしょう。もし罰をあてる様な神様であれば正しい（神）とは思えないなど、考えながら恐る恐る扉を開け吃驚してしまいました。

何十年も見たことの無い金毘羅様の御神体が引つ繰り返っているではありませんか、私は自然に合掌しながら、『起きて下さい、立つて下さい』と思いながら安置させたら、自然と目を閉じ、再度合掌してしまいました。金毘羅大権現様が私を呼んでいたのでしょうか、私の気持ちを金毘羅様に向かせたのも扉を開けさせたのも自分が不思議で、本当に不思議に思えてなりません。

以来、天気のよい日は金毘羅様に行き建物や本殿のガラス戸等に、水掛けをして周りを洗い流し、内宮の扉も開いて合掌しております。其の時、というか大地震の折、初めて金毘羅様の御神体を見た訳ですが、何か大きな動物らしき四本の足で立っている、其の背中にまたがった威圧感を感じる御神体でした。



そこで、冒頭に記しましたようにお祀りされた時期は何時頃であるのか、其のことも判明されました。・・・と言いますのは御神体が安置されている内宮の祠ほこらの中に棟札むねふだが四枚重ね、収めて有るのに気付きました。字も薄れていましたが手に取つてみると、文化七年（千八百十年）に建立されていることが記されて有りました。今年は二千十四年ですから、二百四年前に祀られた事になります。

祖母から聞き伝えられていた家庭の名前（世話人）が、棟札に記してあり読み取ることが出来ました。やはり七軒だったのです。

その後天保三年四月（千八百三十二年）二十二年後には二回目の建て替えがされております。当時ですから屋根等、杉皮か、藁葺わらぶきで朽ちるのも早いため建替えも早く行われたことと想います。更に安政四年（千八百五十七年）には三回目の建替えがされているのですが、その後は明治六年十二月、四回目の改築が行われたことも判明されました。然し、その後現在に至るまで約百三十五年間の記録が残されておりません。

りません。その間には何回かの改築がされたことと思われますが、その間は不明です。

其の為、老朽化ろうきゅうかしていた社やしろであり平成元年二月、漁協や村役場等からの助成をいただき、鈴木工務店により現在の社堂に建替えられ現在に至っています。

私は前記で述べた通り、昔から当家が係わりをもつ家庭であることを心の中に秘めて生きてきていたため、一度は本宮ほんぐうである四国、讃岐さぬき（香川県）の金毘羅様に御参りに行きたく、と思い続けていたため家内と二人でお参りに行って来たのですが、また一つ疑問に思っていたことが判明しました。・・・



象頭山

と言うのは『御神体が動物らしきものの背中にまたがつて』と記しましたが、それは象の背中にまたがつている御神体であることが解りました。



その理由ですが讃岐の金毘羅大権現様が祀られ安置されている場所（山）が『象頭山』という象の形をしている山に祀られている為、神津島の金毘羅様の御神体も象の背中に乗っていることが解かり納得した次第です。

全ての物事がそうであると 思いますが、そのことに関心を持ち続けていると、其のことの疑問の何かが少しずつでも解かってくるものであるとつくづく痛感いたしました。

後世を生きて来られる人達の為にも昔から聞き伝えられた経緯を残しておきたいと思います。

平成二十六年三月十五日

調査記録 石田正一

（本人原稿）



神津大好き！

昭和六年十月二十五日生 八十二歳

浜川 喜久子（彦左）

私の生家は『清七』で、一男四女の末っ子に生まれました。長女は清七の芳子、次女は東京の練馬区に住んでいます。『久六』の静子は亡くなりましたが三女になります。兄の竹次郎は戦死してしまいました。

子供の頃一番仲が良かつたのは、『もろみや』の長女の清水美千代さんでした。同級生で当時の学校の机は細長い二人用で、いつも一緒に机で並んで勉強していました。

美千代さんは、上の学校に進学することが出来たので、中学を卒業

の後、上京し、東京で後に『三国志』等で有名な漫画家の『横山光輝』さんと結婚しました。子供も一人できただみみたいですが、外国で体調を崩して病気になり、病院に入院していたみたいでしたが、「退院して来たよ」と電話をくれたりしていました。でも、結婚して数年で亡くなつてしましました。まだ若くて本当に残念でした。亡くなるまでずっと文通していくくらい仲の良い友達でした。

それと『多幸堂』の浜川依子さんとは同じ二分団で、依子さんは唄がとても上手い人でした。彦左の尚美さん（宜彦さんの妹）も同級生で声も良い人でしたが、奉公に出た先で『結核』を患つてしまい、神津に帰つて養生していましたが、私が嫁に来てすぐの頃に亡くなつてしましました。長生きはしませんでしたが、す

ごく元気な
人で、よく
遊んでくれ
ました。

子供の頃の

遊びは『お
はじき』を

したり、麦
やササギを

入れたお手玉なんかも自分達で縫つて作っていました
が、それよりドッジボールが流行つていて学校の運動

場で時間さえあればよくやつていました。海山の遊び
というのは、畠の手伝い等で忙しくて、あまり行く間
もありませんでした。

昭和二十年頃は戦争も激しくなり、疎開の話も出て
くるようになつきました。清七のばあさんは『貞エ』
から嫁に来た人で、上の姉さんが福井県の方に住んで
いました。東京で働いていた親戚の『又四』の叔母さ
んも疎開しているので、そつちの方が安心だというこ
とで、三月に福井へ縁故疎開することになりました。
日曜日に『宮ツ河』の畠にフキを取りに行つた帰りに
両親が「早くお前、貞エの子も行くツつうしかい先に
なつて行つてくれ、おらあ後から行くしかい」と言わ



自宅手前にて、後ろは映画館(南島館)

れて、すぐに畠帰りの服のまま行かれました。貞工の爺さん婆さんと子供三人、そして私とで船で東京まで出て知り合いの家に一泊して、寝る所がないので押入れの中に入つて寝ました。途中で空襲警報があつて、思わず飛び出しましたが、外へ出ても逃げる場所も分からないので、そのまま押入れの中で一晩を過ごしました。次の日、やつとのことで福井に着くと、伯母さんが迎えに来てくれていました。そして向かつた所は、石でできた家で、見渡す限りの田んぼがある処でした。福井の吉野中学校に通えることになりましたが、戦時中で勉強の授業はしませんでした。学校は兵隊さんの寄宿舎みたいになつてしまつていて、戦争に出ていく

支度やら食事を作る人やら何百人もいました。私達はというと一週間に一日、月曜日に学校に行つて、あくる日から織物工場に行つて兵隊の着る衣服の織物を織るのがほとんどでした。それでも一生懸命やつて卒業証書をいただき、成績は全部『優』をもらつて嬉しかつたのを覚えています。

そして神津から大勢で疎開に来て容易ではないので、又四の叔母さんが『八田村』の友達の所を借りて、子供を連れて別に住むことになりました。働かなくてはならないので、叔母さんの子供を爺さん婆さんに預けなくてはならなくて、私が学校の行き帰りに、その子

をおぶつて連れて行くことになりました。

学校が終わると毎日、爺さん婆さんのところに預けて

いる子をお

ぶつてトン

ネルの中を

一時間もか

けて叔母さ

んの所まで

連れて、そ

して朝の五

時から六時の

暗いうちに

自宅庭にて、一夜だけ咲く月下美人



起きて叔母さんの所に行つて、またその子をおぶつて爺さん婆さんのところに預けて学校に行つていきました。毎日、朝晩朝晩まあと本当に大変でした。そんな中、道の途中で水の流れるこんもりと盛り上がった処に、家族五人がみんな聾啞ろうあ者の方の家がありました。その家の老婆はが、しゃべれませんでしたが、「がんばれよ、何処どこまで行くだあ」という感じで手まねをしながら、可哀想だと泣きながら私をさすってくれました。その老婆さんが迎えてくれて励ましてくれて、嬉しくて嬉しくて、おかげで随分と折れそうな心が助かりました。今でも本当に忘れられません。そして毎日おぶつて連れた子も、戦争が終わって神津島に帰る

時には、もう情^{じょう}がうつってしまって泣き泣き別れて来ました。

その後、清七で二番目に生まれた兄、石田竹次郎は妹の私から見ても、どうにか可愛いらしい人でしたが、太平洋戦争時にシンガポールで戦死してしまいました。それも戦争が終わつたばかりの時に、隊の上官が防空壕から「出るな！出るな！」ときつく言つたのに、言うことを聞かないで外へ出たとたんに撃たれてしまつたそうです。戦争が終わったその時まで生きていたのに、そのまま出なければ神津に帰つてこれたものをと思うと、かあいー、かあいーで（可哀想で可哀想で）仕方ありませんでした。

同じ隊で防空壕に入つていた三重県出身の戦友の方がとても親しくしてくれていて「竹次郎君は大人しい人だつた、どうにも可哀想で忘れられなくて」と泣いてくれて、そしてシンガポールまで慰靈^{いれい}に行つて來たと電話をくれたり、毎年清七と久六と彦左に米と餅を送つてくれます。私達も久六のおじさん達と一緒に三重の時は元気だったのですが、次の時はもう亡くなれていてお墓参りをしてきました。お子さんが一人いて「爺さんから、毎年送るよう」云われているからと、亡くなつた後もずーと送つてくれています。これも戦死した兄さんの人柄から続いていることを思うと、

亡くなつたのはとても悲しいですが、兄さんがこの人達を通じてずーと私達姉妹を見守つてくれてます。で・・・感謝にたえません。まだ二十二歳で独身でしたが、寺の慰靈碑に名前が刻まれています。

八月に終戦になり、熱海で奥多摩方面の疎開地に居た人達と一緒になつて、船を待つて神津島に帰つきました。当時十七歳くらいでしたが、私は内地で働くようになりました。当時十七歳くらいでしたが、私は内地で働くようになりました。当時の北川先生（医師）の薦めで診療所に勤めるようになりました。「医療の免許を取つてがんばれば食べていかれるから、どんな目えしても苦労しても、苦労のし甲斐はあるから一生懸命がんばるんだよー」と言つ

てくれました。事務をしながら免許は持つていなければ薬剤師のような薬を包む仕事もしていました。二年ぐらいい働いたでしようか、だんだんと資格や技術を持つた人達がやつて来て、その中に素人の子供が入つてやることはできなくなつて辞めることにしました。

診療所を辞めると、私が辞めるのを待つていて、親戚の大家のお爺さんから「郵便局が空いているから来ないか?」との話が来ました。まだ電話業務が始まる前で、『金工』の松江睦^{むつみ}さんや『おらんか』の信一郎さん、白崎嗣夫さん達がいました。その頃の郵便局は電話事業もやつていて、電話が開通した時は村の皆から喜ばれました。そして二、三年、電話の交換手をさ

せてもらいました。

当時、『彦左』のお父さん（浜川彦吉）が郵便局の事務長をしていました。私を気に入つてくれられたのか家の嫁に欲しくて、「息子の嫁に来ないか」と誘われていました。「（他



の）何處にも（嫁に）行くなよ」と言わされていて、宜彦さんも優しくて良かつたので彦左に嫁に行くことにしました。

夫はその頃は漁協に勤めていましたが、神津島に『七島信用組合』ができることになり、漁協を辞めて大島の信用組合本店に布団も持ち持ち二ヶ月ほどの研修に行きました。そして今は家を解いて空地になつていまですが、『藤造（橘屋）』の玄関先の一間の部屋を借りて『七島信用組合神津島支店』が開業し初代の支店長になりました。その後に『太郎エ門』の前の今は駐車場

になつてゐる『千歳橋』の前にコンクリート建ての信組の建物が完成して、そこで長年勤めました。その後は役場の収入役も十年勤めています。

私は郵便局を辞めてから家に入りまして。

舅（しゅうとう）は優（しゅううとめ）はとても『おつかなぐ』

夫(上段左)漁協勤務時代

東京都神津島漁業会漁業復興祭
記念撮影
昭和22年5月2日撮入

しくていい人でしたが、姑（しゅううとめ）はとても『おつかなぐ』て恐い人でした。子供は三千男・靖成・秀俊と男の子が三人できました。

そうしている内、役場から「民生委員になつてもらえませんか?」との話を頂いて引き受けさせてもらい、河合よし子さんや浜川依子さん、石田富江さん達と一緒に三十年間もやらせて頂きました。民生委員の時は、相談に来る人も長年やつている間にはかなりの数いました。神津で相談に来たり、訪問したりした人達は金銭面の関係とかもありましたが、ほとんどは病気の人達の相談が多かったです。お医者さんでも看護師さん

でもないので、役場の福祉課や『民生委員協議会』等に持ちかけて、福祉のサービスを受けてもらったり、内地の病院に受診してもらうよう手配したりとかは結構しました。

皆で『島しょ民協総会』などに出席して、東京や他の島やあちこちに行つたりしたのは楽しい思い出です。神津と新島で開催した、民協か社協の連絡協議会では、小笠原の民生委員の人達が、けつこうな旅費もかけて初めて参加してくれて、会合の後、各島みんなで歌つたり踊つたりして楽しんで、すごく良い思い出になりました。

社協の『お見舞い訪問』にも何度も参加させていた
だいて、内地で長期に入院や入所している方達の話を
聞いたり、神津の近況を話したり、中には帰りがけに
泣きながら「おらうも（神津に）連れてつてえ」と
追つかけてこられたり、と一緒に泣いたりもしてきました。
余談ですが、「お見舞い訪問」に社協の前田美枝さん



社協 お見舞い訪問時

と社協の会長の梅田勝海さん、役場の福祉課で『柳作』

りゅうさく

の渡辺悟朗さんと私のグループで千葉の奥の方へ向かつた時、途中で電車を乗換えるために別の電車に乗つて、「発車までしばらくお待ちください」のアナウンスで車内で時間待ちをしていると、勝海さんが煙草を買つて戻つて来たと思つたら、勝海さんの目の前でぴゅーっとドアが閉まつてしまい、「あれやー」と思つた瞬間、勝海さんがホームに一人たたずむのを三人で見ながら電車は走つてしましました。次の電車で勝海さんが乗つて来るのを待つて行きましたが、こんな珍道中ちんどうぢゆうも思い出に残っています。

民生委員になつたおかげで、大変な思いや辛い話もたくさん聞きましたが、こうして内地や他の島の人達とも交友を持てたことを嬉しく思います。長年、民生委員を続けてきたおかげで、表彰状を頂き感謝しています。

神津の中では

『婦人会』や

『芸能保存会』



河合よし子さんと婦人会の踊り

にも入つてい



んなで参加して、日比谷公園から新橋、銀座、数寄屋橋、都庁までの二・五キロを踊りながらパレードしました。今でも機会があれば踊りたいです。

家を新しく建てたあと、彦左のお義母さんが亡くなつて、もう三十回忌も済ませましたが、それからは一人で『面房』めんぼうの畠作業をして『絹さや』作りも二十年以上続けたでしょ
うか？

て、彦左が唄や踊りの練習場所になつていきました。『平七』のお父さんが長になつて、『与四郎』のじいだとか、『仙吉』のおじさんは踊りが上手くて、みんなして七人八人のおじさんが集まつて、「阿波の命」から「大漁節」から島唄をたくさん唄つて踊つて、楽しくてすごく良かつたです。イベントとか大きな催し物があると、踊りの練習の時は何十人と来るので、学校とか広い場所を見つけて練習したりして、本番の時は一番最初に出て唄つて踊りました。依子さんの唄も一番上手くて、こういう時には『多幸堂』系統の一家が入つて唄い踊りしてくれるのが何より大事でした。

昭和五十三年には『伊豆諸島東京移管百年祭』にもみ

ずっと畠通いもしてきましたが、四年くらい前の春頃に面房の畠で倒れてしましました。午前中に畠に行つて、お昼頃に気を失つて倒れて、草の中でそのままになつていたみたいですね。そして午後の四時頃に一人で意識が戻つて目が覚めました。目が覚めたから良かつたものの、これが覚めなかつたらと思うと、本当に『そのまま逝きそこなつた』という感じでした。

そしてどうにか這いはりました。すると工事の帰りだったのか『伝八』のお父さんともう一人乗つた車が来るのが見えました。でも助けを頼み損なつてやり過ごしてしまいました。車はそのまま行つてしまつたのですが、普段の付き合いもしていたお蔭か、伝八のお父さんが変に思つて「どうしたもんだあ、あんだか変だしかいでまあ、どうかしたじやあないろうかと思つて来たあ」と車を引返して来てくれました。そのまま診療所へと連れて行つてくれて、有り難いことに助かりました。

診療所で日射病ひっしゃびょうだといふことで、先生から「危ないところでしたが、畠の方はもう通うことはできなくなつて、ハウスも役場の人にお願いして片付けてもらいました。

今はお父さんも『やすらぎの里』のホームに入り、私もデイサービスやショートステイでお世話になつて

います。次、男の靖成が、内地での仕事を終えて、神津に帰つて来て一から十まで面倒をみてくれています。



ホームにて80歳の誕生会

を思うと、良いことも悪いことも、今はみんな懐かしい思い出です。（笑い）

（以上、聞き書き）

隨想・句・川柳

昭和五年四月二十一日生 八十三歳

稻葉 クニ子（久四郎）

稻葉クニ子さんが思いつくままに書いた隨想や川柳等を、
『文六』の土谷文治さんが筆で清書してくれました。
そのままご紹介します。

雨だれを

じつと眺めて心はうつろ
ボケたらどうする気にかかる

雨だれを

じつと眺ながめて心はうつろ
ボケたらどうする気にかかる

いつの日か

旅立ちの為身辺整理

歩くものはボロばかり

いつの日か

旅立ちの為 身辺整理

出てくるものはボロばかり

年とて身は重く働けず
外と眺めて悲しさつるる

年とりて身は重く働けず
外なが眺めて悲しさつるる

冷蔵庫 開いて

おじと 夫どなま

二ト口なめても 治まらず

肺も心臓も

酸素たりぬと 大さわぎ

冷蔵庫 開いて
いたぞと 夫どなる

ニトロなめても 治まらず

肺も心臓も

酸素たりぬと 大さわぎ

じじつんば

一方通行どなまだけ

足りてばばはだまるだけ

じじつんば

一方通行どなるだけ

つかれてばばは だまるだけ

曾孫来て 可愛く
踊るその姿

曾孫来て 可愛く
踊るその姿

大爺の顔のしわも

ひまご
大爺の顔のしわも

伸びるお正月

伸びるお正月

ばばハ首縦横振
手と振 テレビの

ばばハ首縦横振り
手を振りテレビの
手話もおぼえかね

手話もおぼえかね

クニ

青空ながめて
ほんやりとぼけたか少し
おかしいな

青空ながめて
ぼんやりと ぼけたか少し
おかしいな

雨が降る

少しほ遠慮して
降ればよい

クニ

雨が降る

少しほ遠慮して
降ればよい

クニ

この世はつらい地獄かよ
淨土は極楽 西の国とか
見てみたいな西の国

この世はつらい地獄かよ
淨土は極楽 西の国とか
見てみたいな西の国

節分や

クニ

つ孟の豆多過ぎる

八十四ヶの豆多過ぎる
誰かほしくないかしら

誰かほしくないかしら

クニ

川柳がない、詩がないと
戸棚にもない、押入れにもない
目の前に有るのに

クニ

川柳がない、詩がないと
戸棚にもない、押入れにもない
目の前に有るのに

良い日和
磯へのり採り行きたくて
心がうずく足が憎い

クニ

良い日和
磯へのり採り行きたくて
心がうずく足が憎い

若き日は毎日一人でも神詣り
心あせれど含むをあず
もう一度行きたい 天上山

若き日は毎日一人でも神詣り^{まいり}
心あせれど今はかなわず
もう一度行きたい 天上山

夕暮れは何を食うかと

爺々どなる

女と云う字を終りたい

夕暮れは 何を食うかと

爺々どなる

女と云う字を終りたい

夕焼の西空赤くちぎれ雲
何を見るのかじつと動かす
地球の善悪見てるのやら

地球の善悪見てるのやら

クニ

週一度

心も休まる
やすらぎの里

クニ

週一度
心も休まる
やすらぎの里

午うまだもの
元氣に跳ねよう
根性ひとすじ

午うまだもの
元氣に跳ねよう
根性ひとすじ

クニ

夕焼の 西空赤く ちぎれ雲
何を見るのか ジつと動かす
地球の善悪 見ているのやら

川柳

ぢぢ からつんぼ

ばば首たてよこふり手であります
テレビの手話もおぼえかね

ぢぢからつんぼ
ばば首たてよこふり手であります
テレビの手話もおぼえかね

ひまご来て母がうたえば
おどり出す小さな二才の子のす
ぎぢつゝわ つびと正月

空ながめ流れ雲に手を合せ
遠い國に住む娘孫にことづけ
たの本と云ひたい心

ひまご来て母がうたえば
おどり出す小さな二才の子のす
がた ぢぢのしわ のびる正月

空ながめ流れ雲に手を合せ
遠い國に住む娘孫にことづけ
たのむと云ひたい心

天上山

天上山

天上山神津島のシンボル 私わこの山が大好だ
ニツ山が大好だ都合こう 船に乗る
か三つ采つも島を見立地の事と
ニツ山を見立
手術の痛も心の痛もいや
心も苦くはれけれども若く身体
が足が歩ける時も毎月のように友達
と登る友達が行かなくなつたからゆ
一人や登つて神様の前で芝に座つて
おにぎりを食べ神様に話さける
今日も元気で采つてもうつり毎月を
無事に生かすと暮すアセ風靡して
お礼して横になつて君へ寝あさつた空気
木々の山石の山 くーが峰ワオアミが
なりあはニツ島に生れ育つたアセ風靡して
草やだら心がう思つた今わから足が行かなく
右勢つけじ住う木々年がもも

りあり この島に生れ育つた事を感謝し幸せだと
心から思つた 今わもう足が行けなくなつた 悲
しいけど仕方がない事だもの

川柳

冬

卷之三

毎日毎夜カラスニ空をたく風ノ音
げんかんをあけるよろは音
だれか来たかと小走から出づ
稚モハ風ノ音にだ舌され
零ハリに私心ふとロードふるえ

冬はいやだなあ
毎日毎夜ガラス戸をたたく風の音
げんかんをあけるような音
だれか来たかとふとんから出てみる
誰もいない 風の音にだまされて
寒いのに私わふとんの中でもるえる

雨

雨が止たなあー
トタン屋根をたたく雨
ガラス戸をあけて千葉
雨が勢い殺したよ

雨もいやだなあーー
トタン屋根をたたく雨
ガラス戸をあけてみる
雨が私の顔をたたく
寒いのに

セイ

さあ、いつまでもやりかぎりだくない
で、さういふ宗教にもよりかはいたくない
べきあいう空間にもよりなりたくね
いかほき權威もよりかがりたくね
ながら生て心うこ室一だのゆうれい
ひふく耳でさき目に見て自分二本の
足とアミヤクツーいる
なにか不節合つニニである

もはや

できあいの思想にわよりかかりたくない
できあいの宗教にもよりかかりたくない
できあいの学問にもよりかかりたくない
いかなる権威にもよりかかりたくない
ながく生いきて心しんそこ学んだのわそれ位
じぶんの耳できき目で見て自分の二本の
足とつえで立つている

なにが不都合のことやある

ヒリカ木立ニすれは、一歩をモレたけ
木立モ背骨ノ體ノ骨折大本
痛くてヒリカカ木立、身体上がる

それさえも背骨と腰の骨折六本痛くてよりかかれない身体しよ

よりかかるとすればいすのせもたれだけ
それさえも背骨と腰の骨折六本
痛くてよりかかれない身体しようがい者

夢もあつた

童もあつた

恋もーた

泣き声な子たを流したやうあつた

泣かせた時もあつた

この世も笑ふやうりつらやうが

多いようだつた

八十四年の年月生て來た

若い頃も七十才位迄生ればよいと
思つたのにいつのまにか八十四才になつた
なついた何と來たのだう
雨だれの落るのを見ながら

八十四年の年月生て來た
若い頃も七十才位迄生ればよいと
思つたのにいつのまにか八十四才になつた
なついた何と來たのだう
雨だれの落るのを見ながら

しみじみ思ふ

八十四年の年月生て來た

若い頃も七十才位迄生ればよいと
思つたのにいつのまにか八十四才になつた
なついた何と來たのだう
雨だれの落るのを見ながら

しみじみ思ふ

イスに座つてなす事もなく
毎日はたらける時わまだ畠で
一生懸命レザー切つていたのに

今や時間がありすぎる

イスに座つてなす事もなく
毎日はたらける時わまだ畠で
一生懸命レザー切つていたのに

今や時間があります

ぼんやりとまどから西の空を
見ている青い空夕陽にそまつた
赤いちぎれ雲が流れてゆく

なんとなく涙が出る悲しいのか
淋しいのか生て來た道を

しばしふりかえる

ぼんやりとまどから西の空を
見ている青い空夕陽にそまつた
赤いちぎれ雲が流れてゆく
なんとなく涙が出る悲しいのか
淋しいのか生て來た道を

しばしふりかえる

夢もあつた

望もあつた

恋もした

泣いてなみだを流した事もあつた

泣かせた時もあつた

この世は笑ふ事よりつらい事の方が

多いようだつた

八十四年の年月生て來た

若い頃も七十才位迄生ればよいと

思つたのにいつのまにか八十四才になつた

なついた何と來たのだう
雨だれの落るのを見ながら

しみじみ思ふ

八十四年の年月生て來た

若い頃も七十才位迄生ればよいと

思つたのにいつのまにか八十四才になつた

なついた何と來たのだう
雨だれの落るのを見ながら

しみじみ思ふ

イスに座つてなす事もなく
毎日はたらける時わまだ畠で
一生懸命レザー切つていたのに

今や時間があります

イスに座つてなす事もなく
毎日はたらける時わまだ畠で
一生懸命レザー切つていたのに

今や時間があります

ぼんやりとまどから西の空を
見ている青い空夕陽にそまつた
赤いちぎれ雲が流れてゆく

なんとなく涙が出る悲しいのか
淋しいのか生て來た道を

しばしふりかえる

ぼんやりとまどから西の空を
見ている青い空夕陽にそまつた
赤いちぎれ雲が流れてゆく
なんとなく涙が出る悲しいのか
淋しいのか生て來た道を

しばしふりかえる

人わ苦しめば悲しめば

少しわ深くなるだらうか

人のいたみがわかる人に

なれたらよいのに

娘ざかりをせんそで暮し

娘ざかりをせんそで暮し

西多摩の山奥の頂上迄

行き 熊が夜わ出るからと

トイレにも行けず

たたみ二じよう位しいて有る

カイコでもかつていたらしい

小屋に父母と姉と四人で三ヶ月位い

がた家きのうには行きもやつ

なへ湯はゆか一せよめと机で身体を

流して行水の気分で暮した日々

思ひ出す 十年位前に

一度、当時の達に逢ひに行つたが
みんな死んでいなかつた 一人生て居
た人も今わ死んだ

住んだ小屋も 母屋も もう住む

人もないだらう

変らぬものわ今も昔も川の

ながれだけわ有るだらうと思う

妻ヲみモツウ今モ苦セ川の

ながれだケル有るだらうと思フ

思ひ出す 十年位前に

一度、当時の達に逢ひに行つたが
みんな死んでいなかつた 一人生て居
た人も今わ死んだ

住んだ小屋も 母屋も もう住む

人もないだらう

人々苦しきば悲しきば
小いや深くなるだらうか
人々いたちがわかる人に
なれたらよいに

娘ざかりをせんそで暮し
ニ良摩の山奥の頂上迄
行き熊が夜わ出るからと
トイレにも行けず

たたみ二じよう位しいて有る
カイコでもかつていたらしい

小屋に父母と姉と四人で三ヶ月位い
がた家きのうには行きもやつ

なへ湯はゆか一せよめと机で身体を
流して行水の気分で暮した日々

八十四年も生 / 私の

なにを / ただラララの人にも少な
人にも / いかつたようだ

長い年月うしなつたものや / えたもの

はかりに / かけるすべもない

あと何年生るか / 何ヶ月かと思う

八十四年も生で私わ
なにをしただろう / えらい人にも少な
い人にもなれなかつたようだ

旅の / オカリニヤヌ / 一つの旅が有る
さく旅立が / 平穏 / あるを / うしと
願う

旅の / オカリニヤヌ / 又一つの旅が有る
その旅立が / 平穏 / あるよう / にと
願う

いつも笑って
人生の最後を
あからく生よう
明日に向ひ
根性一つで道を行く



やつぱり家（神津）がいい

昭和三年九月三十日生 八十五歳

梅田千代子（下の沢万次）

私の実家は神津館の『文吉』です。女三人男一人の長女に生まれて、下は鈴木工務店をしている『喜楽』の三重子と『柳七』の久子、そして一番小ごい神津館の人寿延は先に逝ってしまいました。

学校は神津尋常高等小学校で八年通り、楽しく過ごしました。子供の頃は河合よし子さんや『吉兵エ』の関ミヨ子さん、それと『半平』の松本すみさんと私の同級生四人で仲良しでした。

夏の時季は海に行つたり、天草をもぐつたりしましたが、今の様に色んな物があるわけでもないので、昔は集まつてする遊びといえば、た

いがい決まっていて『お手玉』とか『お弾き』^(はじ)ぐらいのものでした。

私達の一級上の学年までは修学旅行に伊勢神宮とかに行くことができましたが、私達の学年は戦争の影響もあってか、修学旅行には行けませんでした。進学もしたかったのですが、今と違つて昔のことでの家の方も事情が許さなくて行くことはできませんでした。

実家の『神津館』は、明治時代に私のお祖母さん



昔の神津館(祭りの時)

めました。神津で一番最初の宿だと思います。

その頃は観光客はほとんど来なかつた時代ですが、村関係のお客さんとか、神津島に始めて水道を敷設しに来た『松戸工兵隊』も神津館に泊まつたと聞きました。私も子供の頃から学校に通いながら旅館の手伝いをしていました。父の鈴木進は旅館の方ではなく『武左』の『清光丸』に若い時から長く乗つていて船長もしていました。

段々と戦争も激しさを増して、文吉のお父さんは三月の初めの頃、まだ寒い時期に恩馳で敵機の空襲にあつてしまつました。可哀想に『友八』の小父さんは機銃掃射で即死してしまつて、お父さんの方は左の横腹と左腕の間を弾が通つて行つて、着ていた厚いセーターを剥ぎ取られたと言つていました。弾で怪我をして担架で運ばれて、四十日あまりの病院通いをしました。

そんな風に神津も危険になつてくると、疎開の話が持ち上がつてきました。場所は西多摩の『小河内村』でした。空襲で生き延びたお父

さんも一緒に、五区と七区の人達と七月の二日に神津を出て伊東に着き、列車に乗つて小河内村まで行きました。

一番先に神津を出て、帰りは最後の方で、疎開していた期間としては長い方でした。小河内村に着いてもすぐには荷物が届かなくて難儀はしましたが、麦や米を持つて來ていたので助かりました。配給米などを貰いに行くのは、何時間も歩いて水滴がぽたぽた落ちる洞窟のような所を通つて役所の配給場所に行かなくてはならなくて



大変でしたが、疎開 자체の生活は、他の区の人達が色々と大変な思いをしたという話を聞きましたが、私達の五区・七区の人達は幸いなことに、そんなに厳しいということはありませんでした。

そして八月十五日に戦争が終わつた事を知つたのは、小河内村に疎開した各家は、数件ごとに別れて住んでいて、離れた峰の方に居たのが『喜平』とか『金助』でしたが、もつとずっと奥の方の部落に住んでいた（下ん沢の）『市川』の小母さんが「やあ、戦争は負けたつうで、負けたつとうじょ！」と言つて教えてながら道を通つていきました。やつと終戦を迎えることができましたが、神津に帰つて来れたのは九月になつてからでした。旅館をやつていたおかげで業務用の米等があり、戦中・戦後も食べる物にはそれほど不自由しなくて済みました。

学校を卒業して疎開に行き、戦争が終わつてから、伊豆の伊東に奉公に出ました。伊東には同級生はいませんでしたが、神津から奉公に来た人は何人か居たと思います。私は、今はもう無いみたいですが伊東駅の近くで『東洋館』という旅館に入り、そこで女中さんの下働きから始まつて客室係として仕事をしていました。三、四年も居たでしょうか。

仕事の内容は旅館業の事なので実家での役には立ちましたが、どうも私は旅では（内地では）暮らせなくて、帰りたくて帰りたくて仕方ありませんでした。

奉公した人の中には行つた先で馴染んで、そのまま結婚して内地で暮したり、逆にずっと働いていたかつたのに、急に呼び戻されて「もう戻るな」「嫁の先が決めてある」等々そのまま辞めさせられた、という話もあります。

私も伊東の方で縁談の世話をしてくれた人がありました、内地で暮

すのはどうしても嫌だつたので、嫁には行かないで神津に帰つて来ました。

した。

神津に帰つて来て、家の手伝いをして暮していました。そしてここ（下ん沢の『万次』）に嫁に行くことになりました。特に世話をやいてくれた人がいたという事ではなくて、島の人は、特に辺り近所の人達はみんな知合いなので、自然に付き合つて結婚することになりました。



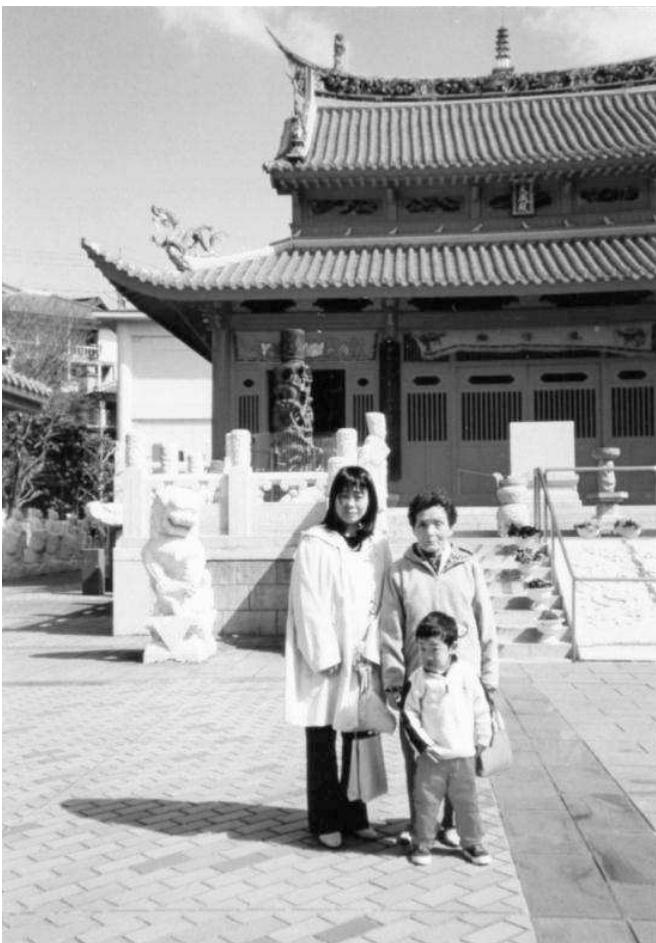
私が万次に嫁に来る前に、夫は新島に兵隊に行かせられて、『箱屋』の小父さん達と同じ隊で新島の宮塚山にいたそうですが、戦争が終わる直前で戦地

に赴くことは無く、すぐに終戦になつて帰つてきたそうです。
結婚した頃、夫の義一は漁師をしていました。船は持つてはいませんでしたが、他の船で南房総の千倉方面とか、あちこち行つて漁をしていたみたいです。

学校を卒業してすぐに郵便局に勤めていましたが、昔の事で、親の賢藏爺さんが「勤め人だけじやあ安月給だしかし、そんなことじやあ食つていかんない」と云つて辞めさせて、漁師にさせられたとのことでした。郵便局にいた頃は『大家』の松江千代さんが局長をしていましたが、可愛がられていたそうで、「俺や局に居てそのまま勤め人を続けてーれば、郵便局長にもなつてーるだ」とよく言つていました。
神津島にも客が来るようになつて、観光客が大勢来ることが分かると、それまで四・五件だつた民宿も一年ぐらいで島中に広がりました

た。万次も『さわや』という名で民宿を始めて、離島ブームの頃には、古い家だったのでやり直すことになりましたが、賢蔵爺さんが「みんな解いてもうだかー、苦労して建った家だつつーに」と心配していたので、母屋に二階を乗っけて増築することにしました。

そして来島した観光客が島を巡るための足が無いので、夫が『レンタカー』を始めることにしました。最初は石段を上った寺の前に『善八』の母屋があつて、寺側の方が空いていたので、そこを借りて車庫を作つて



始めました。家の前にある石垣の壁の処に、レンタカーを借りたい客が、出払つている車の帰りを順番待ちで列を作つて、ずらーっと並んでいたのを覚えてています。

夏場は沢山の客で本当に忙しい目をしましたが、その分稼ぎも多くて、島中が潤つて、沸いていた時代でした。

夫の義一は話すのも達者な人で、村会議員にも成りました。誰に推されたというよりも、村を良くしたいと思つて自分で立候補をしたみたい



当時のレンタカー事務所

です。当時の村長とはあまり合わなかつたようで、色々衝突もしたみたいですが、四期くらい議員を務めていました。

万次に嫁に来て、子供は三人できました。長女は千葉の流山市に住んでいて、次女は『糸丸』に嫁いで、長男の圭一が嫁さんと後を継いでいます。

昔からの事を思い起こせば、良い事も悪い事も色々あつたと思いますが、まあ一今考えると、大病をしたこともないし、何の変哲も無い、ごく平凡な暮らしをしてきたのかなども



夫の新盆 家族みんなで

思います。それが一番いいのかも知れません・・・。

もし、奉公に行つていた頃の縁談で内地に嫁に行ついたら、また違う人生だつたかも知れません。でもその時、やっぱり私は旅の暮らしには向かなくてえ、家（神津）が良かつたみたいです。そのまま今まで、神津に収まつてます。（笑）

（以上聞き書き）

私のあゆんだ道

大正十三年二月一日生 九十歳

石野田 起基（佐吉）

私は大正十三年二月一日生まれの佐吉の長男です。昭和十四年当時、家族は九人（曾祖母、祖父母、母、兄弟五人）もいました。父は昭和十四年十一月に亡くなりました。

子供の頃、私は小学校に入学する前に肺炎を患^{わざら}つてしまい、神津では治療できなくて、大島の波浮港にある親戚の家から母におぶされて大島の病院に通^{かよ}っていました。そのため小学校入学を一年遅らせることになってしまいました。

当時は神津でも牛を飼っている家がけつこうありました。小学五年

生頃から『下の庄九』^{しょうく}で朝と晩に牛乳配達をやらせてもらつていて、六年生の終わり頃からは乳しづぱりも習つていきました。

当時、庄九の牛小屋が、現在の『潮見寿司』の裏にあり、乳牛二頭と子牛を飼つていて、そこに行つて乳をしづぱつて庄九に持つて行き、殺菌をして配達していました。そして日曜日には時々、庄九の父と牛の餌^{えさ}（茅^{かや}）を探りにテンマード（小舟）で小浜まで行き、茅の刈り方を教わつたりしていました。

昔の子供は今の子供と違つて言い方は悪いですが、みんな『ガキ』でした。それこそ何處^どでも彼處^{かし}でも暴れ回つて遊んでいました。三分団と四分団に分かれて仲間でチャンバラをやつて、「今日は試合だ」とか言つて金毘羅^{こんびら}に行つたり、今の中学校の所が昔は山があつて、学校が終わると集まつて、山ん中をこねて遊んだりチャンバラしたり、兵舎もそこにあつて、兵舎の前の苗場で『陣取り』をしたり、野球をしたりしました。野球は本物のバットは無かつたので木の棒の

バットで、野球ボールを使つて、グローブは持つてゐる人がいたかど
うか憶えていませんが、ほとんどみんな手で取つていました。

昭和十四年三月に尋常高等小学校を卒業しました。数え年で十六
歳、現在の中学校二年生に当たります。当時は希望して上の学校に行
きたくとも、島を出て進学するような時代ではありませんでした。
小学校を卒業する前頃から、自分もこうして牛を飼つて生活してゆく
ような考えでいました。

しかし、卒業してからは、当時の神津は『ひらくさ』漁が盛んで、父
が今のは前浜の蛇沢下にあつた、ひらくさを保管しておく『オオブト倉
庫』で働いていたので、私もそこで作業員として四月から働き始めま
した。

そして四ヶ月が過ぎたころ、当時の大島林業事務所で働かないかとい
う話が来て、所長の木村喜三さんに連れられて大島に行き、昭和十四
年八月十日に大島の元村（現在の元町）にある東京府大島林業事務所



大島林業事務所で鈴木賢司君と
にまだ十八歳未満だつた
ので臨時職員として勤務
することになりました。
翌年には『はこや』の鈴
木賢司君が来て、一年後
には『増美屋』の鈴木晴
美さんも来て一緒に働く
き、昭和十八年三月には
十八歳になつたというこ

とで正規に東京府経済部資材課の府職員（当時は東京都ではなく東京
府）となつて働きました。

時代は戦争まつただ中の時で、兵隊になるということで昭和十九年
二月に神津島に戻り、神津島村に駐在となつて、昭和十九年の七月に
『源五』（げんご）の桜井芳子と結婚しました。しかし結婚して一年も経たない

昭和二十年五月一日に現役兵として 境第七〇六九部隊大西隊（隊長の名前）に入営することになりました。

一緒に入隊したのは新島本村・式根島・神津島・三宅島の三十三名で、私達から二つ下の人達と一緒に、神津からは私と浜川喜一（喜三郎）、石田實（重次郎）、松村喜一（松村床屋）、清水義男（文助）、前田喜一郎（元造）、清水幸太郎（甚吉）の七人です。

入隊の土地は新島本村字向山（現在の温泉のある近く）バラツク建ての兵舎で床は板張り、ワラワラムシロを敷きその上に毛布一枚を敷いて寝るという、何ともお粗末な建物でした。

一日の日程は、朝六時頃に起床して食事をとり、その後は兵隊として戦う前の基本訓練になります。訓練の仕方だと、軍隊とはどういうものなのか、初年兵で何も知らないので基本をたたき込まれる訳です。雨の日は兵舎の中での勉強会で、一週間に一々一回は学科の試験がありました。

食事は朝昼の2食分のご飯がハンゴウで配られるのですが、人によつては二回分を朝、食べてしまう人もいて、食事の環境は劣悪なものでした。そんな悪い環境の中、毎週金曜日が新島の家族の面会日で、新島出身の兵に家族が持つて来てくれる食べ物を貰つて食べるのが何より楽しみでした。

此處で三ヶ月間の教育訓練を受けて大西隊に配属となるのですが、この部隊は九州の部隊で、初日に言葉が解らず聞き返すと、いきなりビンタをはられました。『反発している、』と勘違いしたらしいと後で分かったのですが、教育期間の三ヶ月間は毎日、一々一回はビンタで、はられない日は一日もありませんでした。

それは自分がどうこうという訳ではなくて、連帶責任で誰か一人がへまをすると、その人だけではなく一班から三班で三十三人いましたが、「全員外へ出る！」と兵舎から出されて、一列に並んで「股を開け！」と言つて開かされて一人一人ビンタであおつていきます。股を開

開かないとぶつ倒れるくらいで、夕方になつて、今日は無いかな?と思つても、寝る前にも必ずビンタをもらつて・・・。

一番酷かつたのは、私達の班長が『ピーバイ』に行つて、雨にふられて、剣を濡らして鎌びてしまつた、ということで、班だけで集められて、鞘から抜いた剣の背の方で頭をぶつ叩かれた時でした。

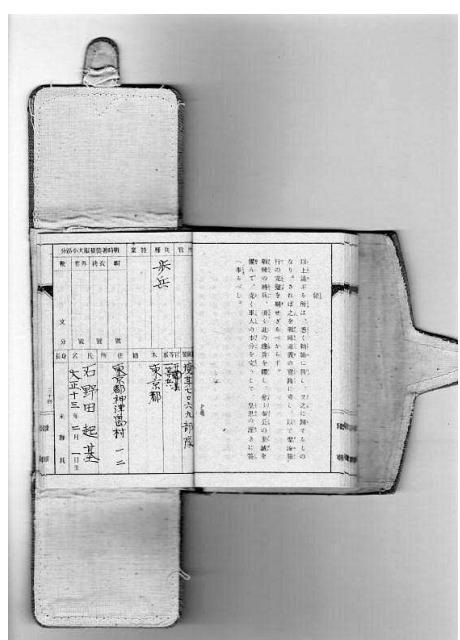
「ピーバイに行く」と言つて班長が向かつた先とは『慰安所』のことで、兵舎から離れた村内（場所は不明）に当時『接待所』として設けられていました。偉い人から時間区切りで決まっていて私達初年兵は行けませんが、小隊に行つたら券があるということでしたが、そんなのは必要無いと思い行きました。たぶん日本全国の軍隊でそういうスペルタ教育的なシゴキが行なわれていたんでしょうが、戦時中とはいえあまりにも理不尽で、そりやあ酷いもんでした。今の若い人達にはとても耐えられないだろうと思います。

私たちの上の年代までは外地（当時の支那）まで行つて戦いましたが、

戦況もどんどん悪くなつてきて、もう外地に派兵して行くだけの余裕など無い状態だったのでしょうか、この頃は日本の中では『本土防衛』という言い方をしていましたが、皆各島で入隊して教育を受けて、何処にも出兵せずに島に戻り、敵が来たら自分達の島は自分達で守る、ということになつていました。

そんな苦しみの三ヶ月間の軍隊生活もあっけなく終戦を迎えてしました。入隊した時はもちろん、こんな短期間で戦争が終結するとは思つてもみませんでしたが、昭和二十年九月十七日に現役満期除隊しました。

軍隊手帳は、私達より以前に兵隊になつて戦地に赴いて、現役で帰ってきた人達の中には、まだ持つている人もいると思いますが、私達には除隊する時に『軍関係の物は手帳も何も全部焼却処分しろ!』という命令が出ました。だけれども私は、五月に入つて教育を受けた、もう八月には終戦で、その間こんなに叩かれて、ひどい目にあつ



て、ビンタだけ貰つて帰つて来た様なもので、得るものも何も無かつたので、これだけは記念にして持つて帰ろうと、出る時にとつ捕まつてぶつ叩かれても、今度はこつちがぶつ叩き返してやる！というつもりで持つて帰つてきました。

私達の一つ上の夫婦は、入隊する時は一度役所を辞めて入隊したのですが、私達の年代から辞めなくていいということになり、神津島村駐在に戻りました。それから昭和二十三年に新島本村、二十五年九月に大島支庁勤務となり妻子も大島に来て約

十年元町に住みました。

私達夫婦は義務教育しか受けていなかつたので、子供だけはなんとか大学を卒業させてやりたいと二人で話し合つていました。そして子供の教育のために東京勤務を希望して、昭和三十六年四月に東京都主税局の葛飾税務事務所に転勤することになりました。千葉県の船橋市に土地を購入し家を建てました。津田沼の駅から歩いて十五分位の家のまわり全部に畑の砂がどんどん入ってきて、女房が一日に三、四回掃除していました。でも住めば都^{みやこ}で、住みやすい所でもありました。

お陰様で夫婦で頑つていたとおり、長女は都立商科短大を卒業して三菱商事に就職し、長男は東洋大学を卒業して千葉経済大学付属高等学校に就職、次男は一橋大学を卒業して丸紅に就職しています。自分一人の給料で家族を養い、子供三人を大学に行かせるのは結構大変で生

活もけして楽な方ではありませんでしたが、昭和五十九年三月の定年退職まで二十三年間東京で勤務し、四月三日に神津島へ帰つて来ました。

東京勤務の時代、私の趣味は旅行と登山でした。山に登りたいと思つたきっかけは、東京に行つてから葛飾・江戸川・中央・江東・文京・中央と三年から五年の期間で移動になつていきましたが、昭和四十四年の十二月に江戸川から移動した中央都税事務所で税金関係の仕事をしている時に、課の中で同じような年配の人達が、山登りをやつていると言つて色々な話をするので、『へえ、こんな連中が山に行けるのか、それなら俺だつて行けるよなあ』と思つて、それから「俺も仲間に入れてくれよ」と頼んで一緒に行くようになつたのが始まりです。

『東京都体育会山岳部』の会員になり、昭和四十七年十月に鳥海山・十和田湖・八幡平の旅に参加したのが最初でした。四十歳から五十五

歳くらいの同じ年配の人達とグループで、東京都体育会の妙高山・火打山の登山大会や越後、苗場山、尾瀬のハイキングにも参加しました。山ばかりでなく、友達と二人で清里高原・野辺山・小渕沢の旅をしたり、妻と仙台松島、金華山を旅行したりもしました。何処も樂しく素晴らしい景勝地でしたが、中でも昭和五十年の七月三十一日から八月一日にかけて参加した富士登山の時、富士山の山頂で食べたスイカの一切れが、何とも言えず美味かつたのは忘れることができませんでした。

昭和四十七年から五十年の四年間、『体育会山岳部』の指導を受けて山登りも多少慣れてきて、おかげ様で高山病になることもなかつたので、五十一年から一人で自由に歩いてみたいと考えて、六月始めから七月の出発まで毎朝六時に起きて一時間位走りこみをして訓練しました。

一人歩きで登るようになつてからは、だいたい七月の二十日から一週

富士山頂にて 後方が私



間ぐらいの間で天候が良い処を見て行くようにしていました。毎年、新宿発の夜行列車で目的地に行き、バスで登山口に着いてから休憩を取り出発、一日八時間歩いて山小屋に泊まり、翌朝出発して次の目的地に宿泊する。という感じで五十一年から五十四年まで富士山、槍ヶ岳・穂高、立山剣岳、尾瀬ヶ原、南アルプスと山歩きを楽しんできました。アルプスは北と中央と南があつて、北と南は行けたのですが、中央アルプスは残念ながら行けませんでした。五十一年行った槍ヶ岳・南岳・北

穂高・前穂高の縦走の時は恐い思いもしました。人と人とのやつとすれ違えるような狭い道も、風が吹いたら這って進まなければならなくて、槍ヶ岳を出て北穂高に向かう途中は、十三キロのリュックを背負つて、夏でも五十センチ位の高さに積もつた雪道をよじ登る時の辛さと、その先の稜線を歩く道幅が狭くて『ここから落ちたら・・・』と必死の思いで歩き、何とか北穂高の山小屋に到着して泊まれました。そして翌日は山小屋を出発して前穂高を下山する時の急斜面でも怖い思いをして、やつとのことで帰ることが出来ました。

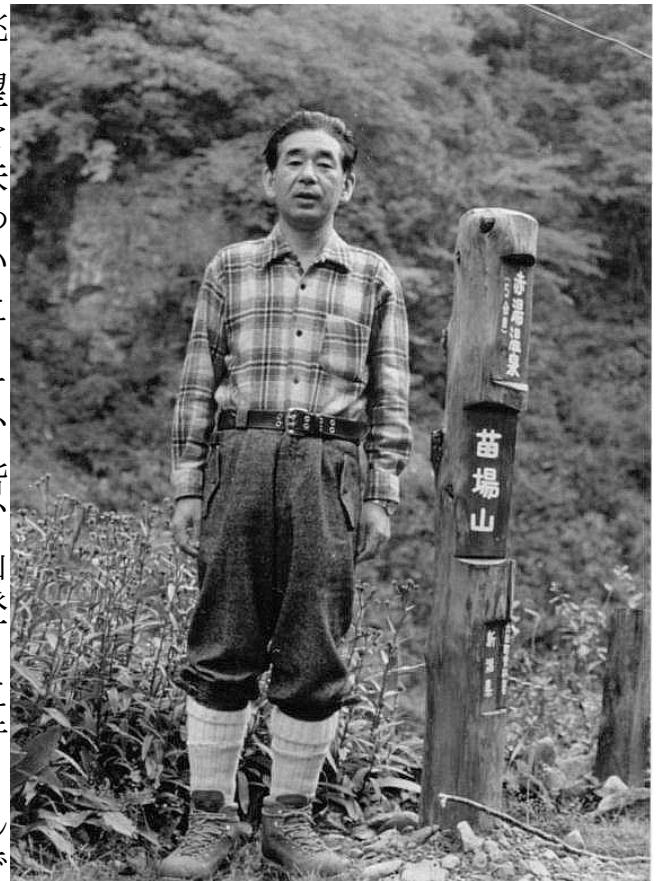
剣岳を登る時は二つ上の人と二人で行きましたが、それこそ下を見ると、落っこつたら帰つて来られないような断崖の細い道を、ひかれた鎖を伝わりながら通つたりしました。恐くて本当に下を見ることができませんでした。物すごくつかったです。

冬山を登山する人の中には遭難した人も多いらしくて、途中の道路にお地蔵さんがたくさんあります。こんな処で遭難したのかなと、夏山

では考えられない場所にあつたりします。下山する時とかの、夕刻だけたり陽気が暗くなったりすると、淋しつぽいような気にも

なります。特にお化けが出て来ることとはなかつたですが。（笑）「一人で登つて面白いんですか？山登りつてのは楽しいもんなんですか？」と聞かれことがあります。結局、登る時は一人で重いリュックを背負つているので結構きついものですが、山小屋に入つてしまふと同じような仲間が何十人も居ますから、食事をしたり休んだりする間に何とはなく会話が始まります。輪の中に入つて話す間に大概「向う方向が同じなら一緒に行きましょう」ということになつて、淋しいことはないし、結構楽しいもんです。

また神津島の天上山は天上山なりの良さがありますが、二千メートル、三千メートル級の山はまた別物で良さが全然違います。登つた時の、高い処からの一面のものすごい景色というものは、特に晴れた日なんかは何とも言えない眺めです。あとはまあ途中歩きながらの高山植



物もけつこう鑑賞できますし、『ライチョウ』が出て来るかどうか期待しながら歩いていると何回か会うことができました。他には特に楽しみというのはないんですけど、結局、頂上を征服した時の達成感というか征服感で見る

眺望を味わいたくて、皆、山登りに行くんですねえ。

こうやつて九十歳を目前にしても心身共に元氣でいられるのは、山登りをして体も鍛えられ、素晴らしい景色を観ることで心の滋養にもな

つたからかも知れません。

昭和五十九年四月に神津へ帰り、三年間神津島の大島支庁出張所で嘱託員として月に十五日間勤務しながら、税理士試験の勉強をしました。六十一年に試験に合格して十一月から『税理士』として開業し、平成四年五月に『東京都行政書士』に登録し、平成十六年の三月十五日に税理士を廃業するまで続けました。

神津へ戻つて来てから三十年あまりの間に農業委員会の会長、農業協同組合の組合長、濤響寺檀家総代役員、人権擁護委員等を務めさせて頂き、平成十四年には法務大臣からの感謝状も授与されました。

そんな中、税理士をしながら、昭和六十二年から農業も始めようと思ひ、『大沼』の畑を開墾（あらこ）して墓の花づくりをして、『友丸』の浜川義春さんの指導を受けながら『宮原』にハウス二棟を建ててガーベラ、オーニソガラムの栽培を始めて農協に出荷していました。

当時、神津ではキヌサヤが一番の農業の収入源でしたが、それが何十

年と続くうちに段々と連作障害が出始めて、キヌサヤも作るのは限界だから、次に神津の農業として成功させていくには何がいいかと考えて、変つたものをやつてみようと思つて花を始めました。しかし花卉類は結局神津の農業としては生活していくだけの収益は上げられませ

んでした。妻が平成

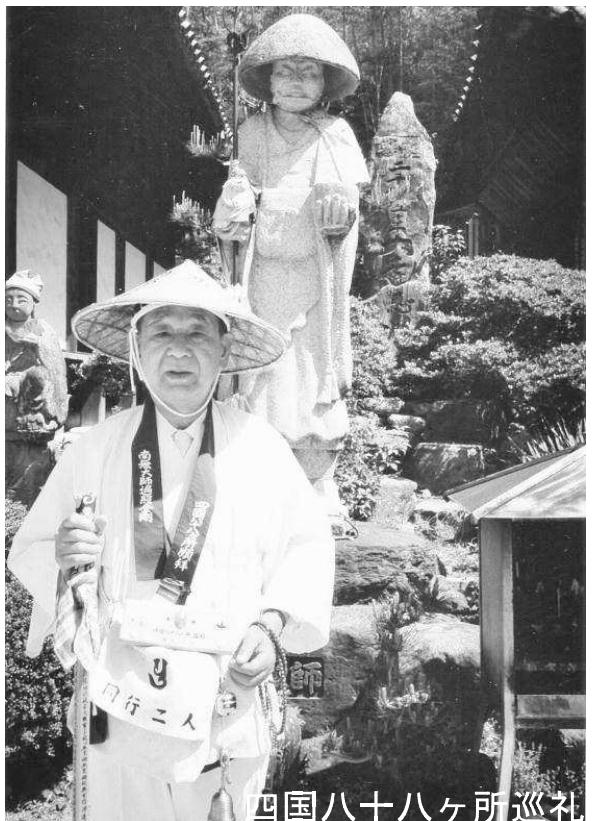


妻との二人旅

六年二月に亡くなつて、一人で花の栽培は続けられないでの止めました。そして七年からは大沼のハウス二棟でアシタバ栽培を始めて、翌年から農協に出荷していました。アシタバ

は『丸源』の関正一さんが農協の組合長をしていた時に自分でも作りながら推奨^{すいしょう}していく、八丈島から種を買って皆に分けてということをしました。そして私が組合長になつてからアシタバを何とか成功させようということで、役場にお願いに行つて村の補助と農協の補助を得て八丈から数トンもの種を購入して、生産者に4分の一の値段で購入してもらい、アシタバ生産を薦め^{すす}めていきました。レザーフアンも『才周』の浜川昭一さんが八丈島から持つて来て始めて、神津に広めましたが、アシタバにしてもレザーフアンにしても今は作る人も高齢化して、後継者も少なくて容易ではありません。今自分でブドウとイチジクを試しに育てていますが、神津島で専業農家として生活していくのは本当に大変な事だと思います。

妻が亡くなり、平成九年から七年間かけて四国八十八ヶ所を巡礼しました。その他にも高野山、西国三十三ヶ所、秩父三十四ヶ寺、坂東三十三ヶ寺、恐山と十年かけて巡礼の旅をしてきました。



四国八十八ヶ所巡礼

妻が元気な時、夫婦一緒に旅行したのは三回くらいでしようか、私は旅行が好きで年に二回くらいは旅行していましたが、女房は私がせつからなものだから、一緒に行くのは嫌だと言つてあまり一緒には行つてくれませんでした。平成三年に奈良と京都に行き、四日間

タクシーを雇いあげて参拝・観光してきました。楽しい旅でしたが、これが二人の最後の旅行でした。

妻芳子が亡くなつて、平成二十六年二月二十八日で満二十年になり



と最後の旅行(金閣寺)

ますが、ここまで元気で来られたのは兄弟（清次の妻）、喜代志夫（央子、邦江、勝正）らの暖かい支援のおかげです。日々感謝しております。

また『コスモスの会』のお母さん等の『給食サービス』を毎月いただき感謝しております。これからも地域の人々にお世話になりながら生きていきたいと願っています。

本誌第二十集が出版される頃は九十歳になつていることと想います
が、がんばります！

（本人原稿及び聞き書き）

思ひ出

清水 滝一

昭和三六年元旦 求ム

一月 元旦

年頭にあたり、新たな決意のもとに日記お書き始める。

元旦 風弱く、うつらうつらと なす事もなく一日お送る。

晴れ 時々曇りの天氣

二日 大嵐丸の乗り初めに行き、あちこちで呑み 五時頃かへる。

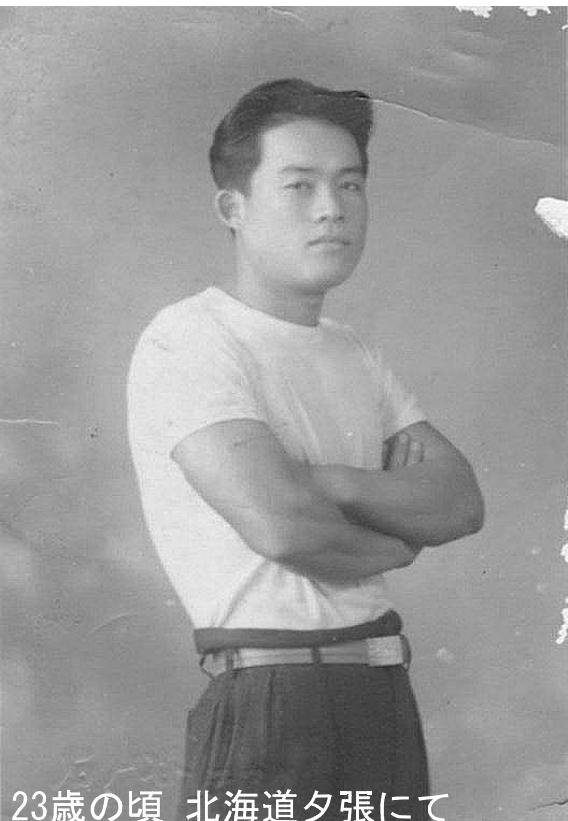
三日 大工組合の会合あり けれども（となり組長のかいせんの為開

ひようの立会いに行く石野

田修一とうせん

午前十二時組合に行く。今年より七百円の手間となる
六時頃会 風弱く 晴
良い正月である。

四日 仕事始め 表雨戸



23歳の頃 北海道夕張にて

鴨居木取り 四人共元気

仕事して五時半終わる。風つよく（南西）

五日

今日 昌義休み 表ランマ鴨居木取り

明日より 取付始める予定 風弱く 曇り

六日 今日も昌義休み 表鴨居取付終わる。西風強く寒い一日であった。

七日 晴れ 西風昨日と同じ様な天氣である。

昌義 今日から出る。今日 表ランマ鴨居取付終わる。
留夫 でん気かんなあつらいるらしい 倘もほしこれども
らいねんにする。

八日 四人そろつて今日も元気に過ごす

今日から大相撲 始まり俺たちも 『大助』通いが大変だ
風弱く 晴れ

九日 曇り

今日 表雨戸袋取付 終わり

久しぶりに汽船が来る。一ヶ月ぐらい来なかつたと思ふ

十日 エン甲板けづり始める（小雨）

十一日 晴れ 西の風

エン甲張り 終わり 今日は引越しだ

ごちそうになり 七時に帰宅 子ども達は ねて居る
早く来る様にしないとと思う

十二日 西の風 寒い日である 今日はこしのいたみはげしくつら
い一日であった

エンコはりおり あみぐら材木取り

十三日 西の風 弱 晴

今日は母さんが炭山に行き、子供達お見ながら仕事おする
早く子供等が大きくなつて いそ遊びでもして暮らしたい

十四日 今日も西の風 弱 内羽目 張り

十五日 今日は勘定日である 十二日分 七千八百円取つてくる
正月より七百円に成つたけれども 勝吾郎 終わり今まで
六百五十円で仕事する事にする 西の風弱く 晴れ

十六日 晴れ 北西の風

今日はやぶ入り 一日子供達と暮らす。
俺の親たちのめい福お 祈る

十七日 西の風 晴れ

今日は満工の仕事 釜戸の仕事

十八日 昨日につづき 今日も満工の仕事 西の風 晴れ

十九日 (旧四日) 今日から勝吾郎の仕事に行く

夜八時 長崎にかすに行く 十一時三十分かすよく入る。
八十匹出る 家へ来たのは三時 (西の風 後北西弱)

二十日 北西の風 弱 勝吾郎仕事

二十一日 西よりの風 勝吾の仕事 今日は表ランマ組み込み始
める

二十二日 西の風 今日で大相撲初場所 千秋楽 大関柏戸 優勝
明日から楽しみがなくなつた。 ランマはめ込み

仕事しまつて、家に来ると食べる前に一パイ呑みたくな
つて仕様がない 呑まない

二十三日 勝吾 仕事 何事もなく一日過ごす

二十四日 今日は源八の仕事 下目張り三人で行く

二十五日 勝吾仕事に行く 一人

二十六日 北西の風 今日は一日寒い日である

二十七日 北ヨリの風 晴れ

今日から昌義 藤八の仕事に行く（ぶた小屋）
とめさんは佐吉の仕事終わり

二十八日 西よりの風 晴れ 何事もなく一日仕事する 今日は
一パイごちそうになつてくる

二十九日 西よりの風 午後から小雨 今日も何事もなく 一人

明日の朝から六時前に
家お出るようにな
今日はヘリコプターが
成工の子供お連れに
来る

三十日 南西の風

弱 一人

三十一日 西よりの風

久助建て前



今日は勘定日 七千八百円 受け取る

二月一日

今日は満工の仕事 西ヨリの風 弱

二日

勝吾郎 仕事

今日は市十郎父お ヘリコプターが連れに来た

可愛そうな祖母 あといく日の命か

思へば物心つき始めた頃からあのふしきれだつた手で
俺の頭おなで 手お引き寒い思いもせすどうにか
一人の男としてそだててくれた恩お思え巴 何事も
してやれなかつた俺は本当の親不孝者ではなかろうか
祖母の枕元へすはると先立つものはただ なみだである

十九日

相変わらず 祖母はねむつたままである まず一、三日は
大丈夫そうである

二十日

今日は汽船で亀兄がくる 祖母もいくらか良い方に向か
つたらしく 意識おとりもどしてくる

二十一日

今日は祖母の容体悪く 今日か明日かの命ではなかろう
か 北寄りの風 小雨

午前中祖母の看病 午後 仕事

午後六時頃 祖母の容体いよいよ悪くきとく状態となり
十一時帰り うとうとしていると ふさこ呼びに来る
時 午前一時五分前 この日は

俺の一生を通じて忘ることのできない時である

二十二日 今日は仕事休み 祖母ののり船その他諸事に
一日お送り今夜は通夜お當み
明日はいよいよ野辺のおくりおしなくてはならない
今夜の通夜はせいだいにして 小雨時々ぱらつき
風もなく さながら祖母の涙かそれとも祖母の死を 天も
悲しむのか 人間もこの様にしてゆかれるものか
さながら眠るがごとく呼べばこたへそうな安らかな死に顔
であつた 僕もこの様に行く様 日頃心の修行しよう

二十三日 今日はいよいよ野辺の送り 何かと心せはしく
入かんの時、最後のお別れをする

これが最後か これが見納めか 思い出は出て来る
なみだおさえがたく祖母よ 安らかに眠れと祈るのみ

二十四日 午後三時 いよいよ出棺
にぎやかに野辺の送りをすませ 五時頃帰る
雜用に追われ一日すごす

二十五日 小雨 北よりの風

今日から仕事行き とめさんも来て四人で仕事する

二十六日 昨日と同じく小雨 北よりの風 今日も四人で仕事する

二十七日 今日は佐エ門の屋根ふき手間
祖母の四十九日の法要を當む

二十八日 今日も仕事 八分

三月一日

今日は仕事終わって かすに行く
「伝兵エ」が駄目で「おれたち」で四十五枚ばかりである

二日

仕事 一人

三日

今日も一人 勘定には ならない

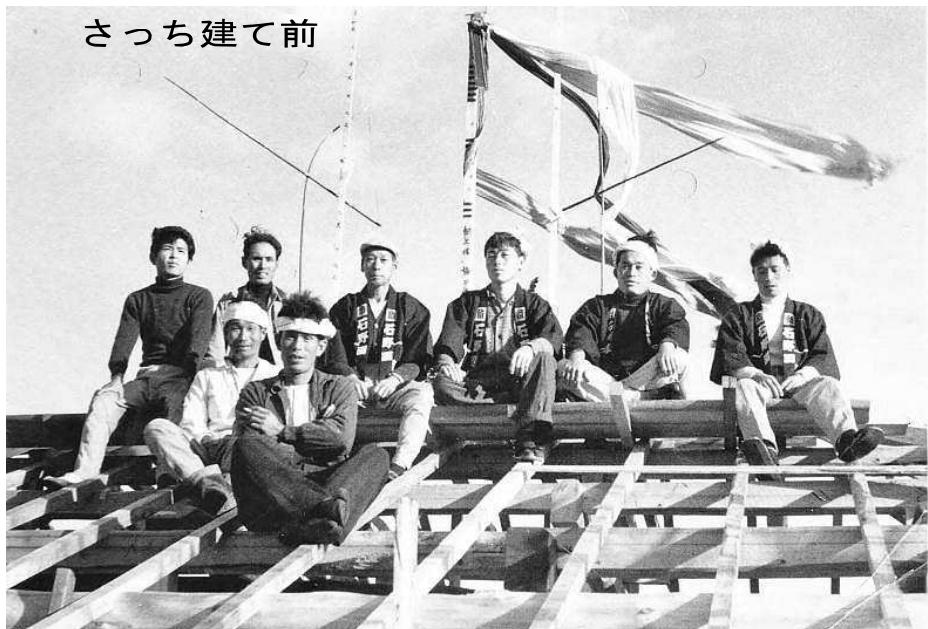
四日

今日も何事もなく一日仕事

北ヨリの風

五日

今日で仕事終わり



九日

八日

七日

六日

今日は亀次郎へ杉山はらいに母ちゃんと二人で久しぶりで 行く

今日から吉三の仕事三人で

今日は昌 もちつきで休み

二人

今日は西よりの風 吉三の

仕事

金吾よりうなぎがつう一本
買つてくる 百五十円

- 十日 今日は（旧二十四日で休み）半内家の仕事手間
- 十一日 （二十五日 休み）一日遊ぶ
- 十二日 吉三の仕事に行く 今日から春場所始まる （昌休み）
- 十三日 仕事する （昌休み）
- 十四日 仕事する （今日は三人 小雨）
- 十五日 今日 勘定 四千九百円受取り（三人で一万二千六百円）
- 二十三日 仕事 山田（箱さし）（八分）山田の母午後二時頃死去
- 三十一日 仕事 今日勘定 一万一千二百円受取
- 四月一日** 今日は色々な事のあつた一日である
- 午後一時半頃 長十郎の家が火事になり 現場へ行く
- 半焼す
- 三時頃仕事場へ来たら 吉三の母がたおれる
- 今日は半日
- 二日 今日外回り下目張り 吉三の母相変わらずなれど元気なり（午後にわか雨）
- 三日 今日半日 下目張り 吉三の母良い方に向かう
- 十一日 休み 今日は 体の具合悪く休み

十八日 今日は映画に行く

十九日 今日から平草 出漁す 見通しは良いもようなり

二十一日 今日 吉三丸 初出漁

二十二日 今日伝次郎丸で 潜水機おやらないかと言つて来たけど
あまり気がすすまない

二十三日 今日は 初美病気のため七分

二十四日 長根により草に行き 九時に仕事に行く

二十八日 親方 今日北海道から来る

三十日 今日は村長選挙日 松本氏 有利のもよう

五月一日 今日はお寺の屋根替えにて 一日過ごす

十九日 今日は ひよこ八こかへる十九日目

二十日 今日 ひよこ八こかへる（九ツ）

二十一日 今日 清子 下田へ行く

二十四日 子供のため休む

六月一日 今日で 吉三終わり

三日 番行き 道具せいり

四日 番行き 明日より ごん治へ行く予定

五日 今日より 権次郎仕事

八日 今日 佐吉 春雄 潜水機でしほられ亡くなる

九日 休み 体具合悪く

十日 今日は春雄の葬式

若くして世を去つた若者のために冥福を祈る

十三日 今日はつまりへ たかべ

つ子に行き 大漁する

十六日 滝休み 今日は天草の

口開けのため

二十日 休み 天草

二十一日 リ リ

二十二日 休み 天草づかれ

二十九日 今日つまり 突棒に行き



40代の頃 磯にて

父と母のこと 「父の日記」

鈴木 初美（すしや）

父 清水滝一が平成二十三年三月に八十一才で亡くなり、昨年三月に三回忌も済ませました。

母（喜代子）は父が亡くなつてからは気落ちしていましたが、「三回忌も済ませてほつとしたー」と言つて、不自由な体でも自宅で頑張つて生活してデイサービスも利用し始め、これからはもう少し外にも出れて生活を楽しめると思っていました。

毎日、いつでも母のもとを訪れ、訪ねれば笑顔で迎えてくれて、あれこれ指図されれば「わかつてーるよー」と言い返し、おかげを持つて行けば嬉しそうにして「あれ、うんまいやなー」と喜んでくれて、と

いう生活があたりまえで、まだ、まだ、この日常が続くと思つていましたが、昨年の夏に体調を崩し、私たちが心の準備も出来ないうちに十月六日、父のもとへ旅立つてしまいました。

四十九日も過ぎ、母の荷物の中から何冊もの日記が出てきました。

手術をする前の元気な時から、平成二十五年九月まで、訪ねて来てくれた友人や私たち家族へ感謝の言葉が綴られていました。

子供達と自宅縁側で



九月一日で、デイサービスを利用して「懐かしい人と話も出来た、お風呂も入れてよかったです。」とあり最後が「元気になりたいなー」で終わっていました。九年以上闘病してきた母の切実な気持ちだつたと思います。

それと一緒に、父の昭和三十六年の日記が出てきました。

五十三年前、私たち兄妹が六才、四才、二才の時です。両親三十一才の当時の生活の苦労が伺えます。結婚当初は借家で、文助の隠居や、市平の隠居を借りたそうです。

日記は自分たちの家を持つてからの、一月～六月までですが当時の暮らしぶりや、大工仲間達との仕事のこと、大工の日当が七百円に上がったとか、現金収入の少ない当時の苦しい生活でも三人の子供を愛情をもつて育ててくれたこと。

仕事が終わってから夜中にかけて『かす』に行くなど、休むことなく働いていたのだと思います。『かす』とは小さな魚のようです。

「そうしなければ、生活出来なかつた。」とはよく言つていました。

テレビのある家はまだ少なくて、大相撲を見せてもらいに近所の『大助』へ通つていたこともわかります。

又、時化つづきで一ヶ月くらい船が来なかつたともあり、当時の暮らしの大変さ



民宿営業時 50代の頃

が想像できます。

母は、平成十八年、七十七才の時お年寄り作文集に『思い出』という文章を聞き書きで寄せています。父も「おいの人生は波瀾万丈だつ

た、ドラマになるよ」とふざけていっていたこともありました。夜中から朝方にかけて『より草』や『かす』にいって不思議な体験をした話は聞いていましたが、熱心にも聞いていなくて作文集に載せてほしいと頼んでみましたが、「いいやー」と言われてそのままでした。今となつては聞いておけば良かったと後悔です。

いつまでも親は元気なものと思って、後でもいいや、後で聞ければいい、今は忙しいから後でやつてあげようとしていたことがたくさんあります、今となつては叶いません。

本当に言い尽くされている言葉ですが、亡くしてその大事さ、親の有り難さを、今更感じています。

今は、迎えに来た父とケンカをしながらも楽しく過ごしていて、先に逝つた兄姉や、懐かしい人達に会えて昔話に花を咲かせていると思ひます。

尚、日記の中ではカナ遣いや、読み取れない字、意味のつながらない所も書いてある通りに、またどうしても解らないところは空欄にしました。

また屋号、人名など実名が出てきますが、50年以上も前のことですのでそのまま掲載しましたが、ご容赦下さい。



70代の頃

あ　と　が　き

平成七年から発行してきた『神津島のお年より作文集』も今回で第二十集を発行することが出来ました。収められたお年寄りの人数は延べ一〇七名になります。自筆されお持ちいただいた方々、こちらの問い合わせに、昔を思い出しながら長時間の録音にご協力頂いた方々、掲載される写真を探し出し、収録にも協力して頂いたご家族の方々、また関係者の方々に改めてお礼を申し上げます。

作文集も二十集を数えると『関東大震災』『戦争』『疎開』等の神津島の昔の歴史を語れる人が、もうほとんどいなくなつてきました。今回の石野田起基さんが九十歳で、戦争に招集された最後の組です。なかなか語れる人も少なくなつてきましたので、二十集ということで区切りを付けて、これからは毎年ではなく原稿の集まつた時点での発行ということをご理解を頂きたいと思います。

平成二十六年三月

神津島村社会福祉協議会

お年寄り作文集 第20集
発行 平成26年3月
神津島村社会福祉協議会
TEL 04992-8-0819